

《海外出張報告》

中国・新疆ウイグル自治区訪問記

渡戸一郎

はじめに

明星大学社会学科では1999年度より、日本私立大学協会を介して中国・新疆ウイグル自治区教育庁から研究員を毎年1名受け入れている。99年度の西林研究員、2000年度のグリナル研究員である。そこでこの機会に、同協会主催の「中国シルクロード研修団」に参加し、新疆ウイグル自治区の大学などを視察するとともに、帰国した元研究員の話聞き、また、いくつかの都市を訪問した（9月3日～10日）。旅程は、浦東地区開発が進む上海を經由して新疆ウイグル自治区の首都ウルムチに入り、次いでオアシス都市・トルファン及び国境都市・カシュガルを回るコースであった（帰途は北京経由）。以下、このコースに沿って、若干の補足を加えながら、報告したい。

1. 上海の都市的変貌（9月3～4日）

正午に上海着（1999年10月オープンの浦東新空港）。空港から上海都心まで約50km。真新しい高規格道路を飛ばす。上海の人口は約1,305万人（1997年）。重慶市に次ぐ中国第二の都市である。しかし、市区（市街地）人口に限定すると、1,018万人で、中国最大の都市ということになる。上海は半植民地下の中国における近代工業発祥地であったが、その後、金融・教育・文化などを含む多機能都市として急成長した。しかし建国後の計画経済による重工業優先の都

市戦略により、上海は工業の単一機能都市に抑えられ、国際的地位が低下するとともに、都市建設も大幅に遅れた。⁽¹⁾

1990年、中共中央および国務院は浦東の開発開放を宣言。1992年、14全人代で、上海の21世紀に向けた、「国際的に通用し一流の水準を満たす、外向型、多機能型、現代型の新区を建設する」という戦略目標を確定した（具体的には、金融・貿易、商業等地区、総合自由貿易区、資本および技術集約型輸出加工区、高度産業技術開発地区の建設）。⁽²⁾ その目玉となる浦東新区は、マンションやオフィスビルの建設ラッシュの真最中である。

ここにはすでに上海人口の1/10以上の180万人が居住しており、さらに旧市街地からの人口転入が継続している。地下鉄2号線も延伸してくる予定であり、また、モノレール計画もあるとのこと。近郊農村だった当地区の農家は土地使用権の貸し出し（中国では土地は国家が保有しており、人々はその使用権のみをもつ）で豊かになり、あまり営農していないように見える。沿道には、「服務経済建設」（サービス経済を創ろう）「服務人民奉献社会」「我為人人 人人為我」などのスローガンが立つ。

468mの東方明珠放送テレビタワーの263mの展望台から、新浦地区の新ビジネスゾーンと外滩（バンド）の旧市街を臨む。植民地都市時代の旧共同租界と旧フランス租界、および旧日本人街の位置を確認する。2階建て長屋の里弄

(リロン)住宅がぎっしりと詰め込まれた地区は、高層建築群や大規模施設のあいだに未だ見ることができるが、近年のブロック単位の再開発で次々に消失しつつある。なお、展望台の一角には、新疆ウイグル自治区・ウルムチ市まで3,150公里 (km) との表示があった。

翌日午前中は、豫園、外灘 (The Bund)、人民記念碑、ペイブリッジ (ここを渡ると旧日本人街) などを見学。旧上海市役所は現在、銀行となり、新市役所は人民広場に移転している。

2. ウルムチの高等教育事情(9月4~5日)

14:35 上海発。中国新疆航空 (Xinjiang Airlines、旧ソ連製のイリュージン) にて雪をいただく5,400m級の天山山脈を南側から越え、一路、ウルムチへ。機内食にはハラール・フードの牛肉が出る。もうここはイスラム文化圏であることを実感する。ウルムチでは9月1日から貿易交易会を開催中で、飛行機は満席であった。

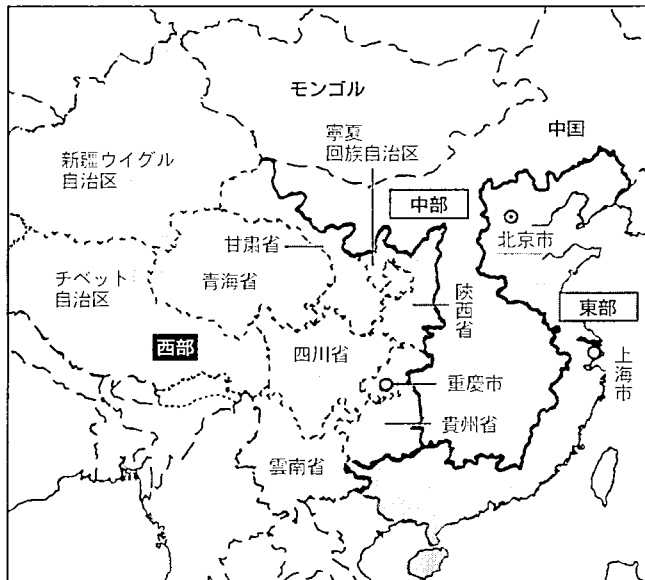
19:15 ウルムチ空港着。ここは標高800~900mあまり。26℃。上海との時差は2時間あ

るため、22:00近くまで明るい。ただし、中国は単一の全国標準時間が採られている。そのため、当地の人々の夏の起床時間は7時頃、就寝時間は午前零時頃。なお、就労時間帯は9:30から13:30、15:30から19:30で、昼休みが2時間あるという。

周知のように、中国の「改革・開放」政策の具体化は1979年以降、広東省・福建省・海南島の経済特区から始まり、90年の上海経済新区へと、沿海部中心に進められてきたが、1999年の政府の「西部大開発」⁽³⁾の号令のもと(図1参照)、当新疆ウイグル自治区では地下資源開発が大々的に進められ、天然ガスを上海まで送るパイプラインの建設が始まった。また、石油探索のため、和田(ホータン)まで砂漠の中に道路を520km(輪台-民豊間の南北縦断道路)も建設したという。

空港から市中心のホテルまでバスで40分。ウルムチ市は天山山脈北側にある人口180万人の、西域最大の都市だ(図2)。漢民族のほか、ウイグル、カザフ、キルギスなど13民族が居住し、漢語とウイグル語が標準語。自治区の政治、経

図1 中国の3つの経済地帯



濟、文化の中心都市である。年間降水量は少なく、9月も10mmで乾燥している。大気の透明度も高く、何でもくっきり見える。なお、ウルムチから国境までは約200km。

空港からの道筋から見た市街地は、高規格道路の左右に色とりどりの花が植えられ、上海と同様、緑化（花いっぱい）運動に力を入れている。ちょうど帰宅時間で、沿道にはゆっくりと歩道を歩く人、路傍にたたずむ人、自転車やバスで家路を急ぐ人などがシシカバブの屋台を見かける。なお、最近ウルムチ市では市中心部への乗用車の乗り入れを制限したため、渋滞がかなり緩和されたらしい。⁽⁴⁾

(1) 新疆ウイグル自治区教育庁

翌5日は一日かけて、新疆ウイグル自治区の教育関係機関を回る。まず自治区教育庁（旧・教育委員会）を表敬訪問。主任、副主任、秘書長のほか、外事処長、高教処副処長らに会う。ここでは、ウルムチ市の人口180万人の70%が漢民族である一方、自治区全体の人口1,700万

人の62%が少数民族だと聞く。そのうちウイグル族は約700万人。⁽⁵⁾

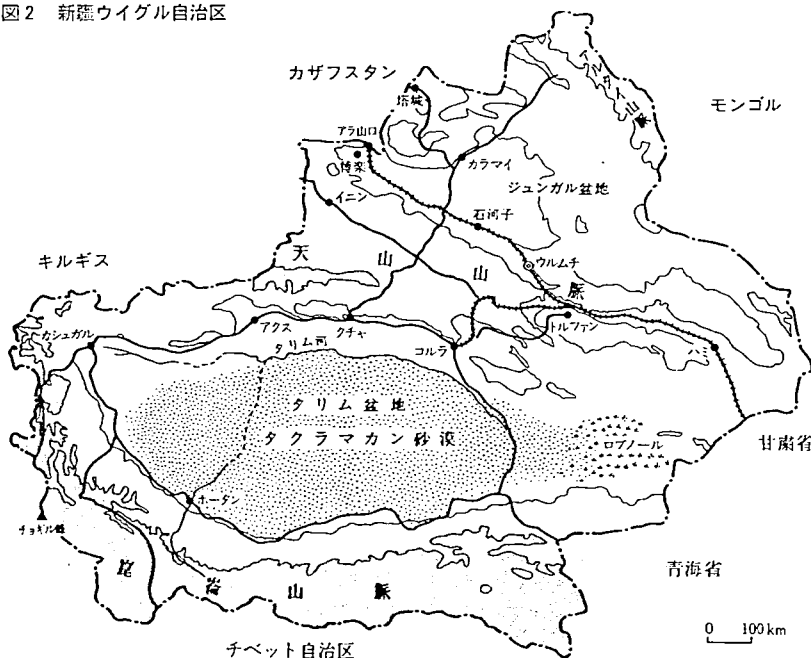
自治区の教育事情は、小学校から大学まで9,000校余あり、430万人の学生、32万人の教職員がいる。学校間の距離がかなり離れており、かつ教科書を7言語（漢語、ウイグル語、カザフ語、キルギス語、モンゴル語、ロシア語、シポー語）で作成するので、教育コストは高くつくという。大学は17校で、師範学校が多い。総合大学は新疆大学と師範大学の2つだけであり、現在、新疆大学を中心に専門大学の統合計画が進行中である。

(2) 新疆大学

新疆大学では、中共新疆大学委員会書記の王桐氏（副教授）と副書記の李維青氏（副教授）を表敬。昨年度、明星大学社会学科に研究員として派遣されていた西林先生は大学の外事処主任（外事課長）になっており、今回のわれわれの訪問を受け入れる責任者であった。

以下は、王桐氏らによる大学の説明である。

図2 新疆ウイグル自治区



(出所) 『岩波現代中国事典』(岩波書店, 1999), p.559

「日本私立大学協会の新疆での影響は大きい。とくに若い人が先端技術を学べる。これまで49人が派遣されたが、帰国した人の多くがすぐれた教師や研究者になっている。タシプラート先生が副学長となったように、そのうち何人かはリーダー格となっている。」

「新疆大学は1924年、法律専門学校として発足し、初めはロシア語と法律を教えた。その後、1935年に新疆学院、1950年に新疆民族学院、1954年に新疆学院、1960年に新疆大学となった。現在の在學生は15,000人。職員2,400人。教員1,300人（うち教授82名、副教授385名）。大学のもとに4つの学院があり、学科は9の単系がある。また、全學生を対象とする4つの部（体育、外国語、中国語、社会主義理論）と3研究センターがある。博士課程は2研究科（計算数学と民族文学）、修士課程は27研究科で、今後は大学院の充実により高レベルの人材の不足に 대응していくことが課題だ。」

「1978年、重点大学に指定され、1997年、国の『211プロジェクト』（21世紀に向けて全国の110大学を選んで重点的に強化する事業）の対象となった。具体的には、重要科目の整備（少数民族文学、応用数学など）、学生サービスの向上（寮、食堂など）、基礎設備の建設（講義室など）に取り組んでいる。この10年は文系と理系の基礎研究を重視していたが、工業系と医学系が弱いので、今後充実させることが課題だ。そのためは、博士号をもつ優秀な教員を集め、育てることが重要だ。」

「大学進学率は新疆では15%。結婚年齢は25歳である。ただし、都市部と農村部で異なる。学生の授業料は無料。ただし、生活費は自己負担。全員が寮に住んでいる。新疆大学の場合、学生の民族構成は漢民族と少数民族が半々となっている。ただし、少数民族には入学上の優遇措置がある。教員の民族構成も漢民族・少数民族

半々だ。なお、新疆のような内陸部の大学の教員給与は低く、問題になっている。しかし最近では大学でもビジネスは可能となり、中央政府も支援している。また、最近では大学の教職員住宅は個人所有化され、4～5万円で購入できる。」（なお、日本人留学生はウイグル語など、30人ほど在籍しているとのことであった。）

（3）元日本派遣研究員の声

新疆大学では、元日本派遣研究員との懇談会がもたれた。現在、新疆大学、新疆師範大学、新疆医科大学などに勤める教員たち16人が集まってくれた。明星大学理工学部日高研究室にいた李燕萍（リー・エンピン）先生は新疆大学で教鞭をとっている。以下、元研究員の話。「日本での研修生活は、自治区政府から毎月8万円もらって家賃1万5千円では、生活が大変だった。大学が遠いと交通費の負担も大きい。生活費を15万円くらいもらわないと、落ち着いて勉強できない。また研究費がない。」「日本留学中、とくに困ったことはなかった。最近、日本へ行く新疆の若者が増えてきているが、期間が1年では短い。学位取得を目指す人をどう支援するかも考えてほしい。」「新疆に帰ってくると、日本語を使う機会がない。日本の研究者と共同研究を進める機会が作ればよい。」

（4）新疆工学院

この大学は旧ソ連の指導で1953年に創立された。やはり「211プロジェクト」の110重点大学の一つになっている。ここには元日本研究員の教員が12人勤めている。13学系で、在籍学生数6,800名。職員数1,600名、教員数600名（うち教授51名、副教授179名）。現在、新疆大学との統合計画が進行中で、2001年に統合の予定。なお、日本派遣研究員の2/3は少数民族であるという。

3. オアシス都市・トルファン(9月6～7日)

トルファンまで2年前に開通した高速道路を約200km、日野自動車の大型バスで走る。約2時間の走行中、天山山脈を越えるまでは草原だったが、峠を越えると荒涼たる瓦礫の不毛の地に変わる。日中は40℃にもなるという。途中、70mの風が年間40日続く「風口」という場所に、風力発電の風車が500機余り林立している。新疆の電力事情は、火力発電と風力発電で十分足りており、停電もないとのこと。ただし、ウルムチ市は水不足だという。

バスはやがて豊かな水量の白揚溝を越える。だが、この川はタリム盆地に向かって流れ、次第に砂漠の地中に消えていく。また、塩湖と真水湖が見られ、高速道路に沿って一部、カシュガルまでの南疆鉄道が走っている。この高速道路沿いには光ファイバーケーブルと電話線が埋設されているとのこと。しかし、春には山の雪解け水で川が縦横に出来、道路が流されないように、道の左右に水路が掘られている。

さて、トルファン地区は中国でもっとも低い場所にあり、面積の40%は海拔下である。今回訪問できなかったアイディン湖はマイナス154mという。トルファンはオアシス都市である。その緑の都市が見えてきたときには、本当にほっとする。地元の人が緑色を好むというのも納得がゆく。人口密度は高く、261人/km²。トルファンの産業は、観光、葡萄、天然ガスを主体としており、市の人口は15万人で、その80%がウイグル族である。

まずカレーズを見学する。カレーズの水は年間を通じて一定しており、飲料水と灌漑用水に利用される。トルファン地区には約400本あり、通常は3km、長いもので10km以上だという。水はひんやりと冷たい。次いで日干し煉瓦で造った葡萄乾燥倉を見る。ここで干し葡萄ができる。

ムスリム用の清真レストランで昼食後、観光地の高昌故城とアスタナ古墳(高昌国の墓地)、千仏洞、火焰山を見学。途中、羊肉を荷馬車で売る老人を見かける。

夜、ホテル前の夜店を見学した。約800mくらいの大規模なもの。売り手はほとんどが漢民族。後で聞いたところでは、ここは臨時のバザールで、ウイグル族のバザールは別の場所にあるとか。それにしても漢民族の進出は見過ごせないものだ。暑い日中を避け、帰宅して夕食をとってから家族連れ、親子などでブラブラ歩きする人々でにぎわう。全体として衣料品が多く売られていたが、モノは豊富(なかには日本のゲームのパクリも)。

翌早朝、散策してみると、仮設店舗の番台となっていたベッドにのんびり寝ている人も見かける。街を少し散策し、幼稚園に母親、父親に連れられて登園してくる子どもたち、小中学校の登校風景などを見る。なかには自転車通学も見かける。校門のスローガンに「有理想 有道德」「有規律 有文化」とある。

午前中、火焰山の裏にある葡萄溝へ。山の谷間を利用した一面の葡萄園。山に向かって日干し煉瓦の葡萄乾燥倉が林立している。ここの農家の年収は5～6万円、一方、労働者は12万円だという。所得格差は倍である。

続いて交河故城へ。ここは二つの河の合流点の中州に造られた自然の要塞で、シャーシー人により造営され、唐時代にもっとも栄えたという大規模な日干し煉瓦の軍事拠点である。

昼食後、トルファンを出発。一路、ウルムチ市への復路を辿る。茶色い天山山脈を越え、草原に出ると、またほっとする。

4. 国境都市・カシュガル(9月8～9日)

前日深夜、ウルムチを立ち、空路、カシュガルへ移動。いよいよ人口400万人のうち、ウイ

グル族が92%を占めるカシュガル地区に来た。ここは完全に中央アジアのイスラム圏に位置しており、本来、中国に属すること自体が不自然な印象を受ける。⁽⁶⁾カシュガル市は人口40万人で、74%がウイグル族、漢民族は20%、ほかにウズベク族、回族、タジク族、モンゴル族などが居住する。年間降水量は100mmと極端に少なく(9月は5mm)、乾燥している。が、われわれがカシュガルの職人街を歩いているときにはほんの少し雨がぱらついた。

99年12月にウルムチとの間に南疆鉄道が正式に開通し、カシュガルには漢民族がどんどん流入している。一方、現地ガイドのY氏(ウイグル族)によれば、ウイグル族は「中央アジアのユダヤ人」と言われるほど商売がうまく、カシュガルからカザフやキルギスに商売に行っている人は多く、また北京や広州にも行っている。中央アジア道路は1992年に開通したが、ソ連から独立後のカザフスタンやキルギスタンなどの経済状況はよくないので、取り引きはバランスしておらず、国境都市としての潜在的可能性は、まだ十分に発揮できていないようだ。しかし、市中心の人民路と解放路の交差点はまさに「東西南北の文明の十字路」だ。カシュガルのバスターミナルからは毎日パキスタン行きの長距離バスが出ている。

(1) カシュガル師範学院

1962年創立のカシュガル師範学院を訪問。ここでは中学・高校の教員を主に養成している。5,600名の在校生のうち、少数民族の学生が約70%、女性が6割前後を占める。今後3年間で、在校生1万人規模に拡大する予定。現在、言語部の5言語の中から漢語の教学を独立させる計画がある。少数民族の学生が入学後、予科で1年間漢語を学習するが、その教員が不足しているためという。ちなみに、民族小学校では3年から漢語を教えるようになっており、漢民族の

小学校では4年から英語を教えているという。

学生たちは午前2時間、午後4時間の授業を受け、夜は寮で自習を2時間くらい行うという。寮は6人から8人部屋で、民族別となっている。ただし、お金さえ出せば1人部屋も利用可能とのこと。現在、図書館を増築中で、普段は23時まで開館している。

教職員数931名のうち、少数民族は556名(59.7%)。ウイグル語、ウイグル文学を専攻する留学生が18名(アメリカ9、イギリス4、韓国3、スイス1、カナダ1)在籍。私立大学協会の研究員だった者のうち、5名が師範大学に戻り、政治歴史部長、物理学部講師などになっている。

(2) イスラム都市の諸相

アバカ・ホジャ墓、イスラムの宗教学校を見た後、明星大学に来ていたアーリップさんのご両親のクトルク家を訪ねる。日干し煉瓦の壁に囲まれた道を進むと、父親のクトルクさんが我々を待っていてくれた。アーリップさんは長田教授の下で勉強し、その後、千葉の企業に就職している。なお、次男も日本におり、末の娘も東京電機大で修士取得後、JR技術研究所に就職しているという。美しい絨毯の上でメロン、スイカ、葡萄など、山盛りの果物をご馳走になる。砂漠の民族は伝統的に、後から来る人のために、自分の食べ残しの果物を地面に伏せて置くという話を聞く。

中央アジア最大のモスクであるエティガールモスクと、その前の職人街とバザールを見学。カシュガル地域がイスラムに改宗したのは926年だが、このモスクは1426年創建という。バザールや職人街は業種別にブロックが分かれており、活気がある。金属製品はパキスタン産が多い。また、少年が店などで働く姿をよく見かけた。

夕食はカシュガル市の三代前の市長さんの家でとらせていただく。トルコ系の伝統を引く住

まい。立派な絨毯の上に食事用の布を広げ、その上にご馳走が並べられる。元市長さんはすでに亡くなっており、息子さんは上海で商売しているという。

一端、ホテルに戻り、夜の屋台に出かける。ここで非常に興味深い光景を見た。2車線の道路を挟んで左右別々に漢民族の屋台、ウイグル族の屋台が列をなしているのだ。ただし、ウイグル族の店には酒類は売っていないため、そちらの屋台に入った客は漢民族の店からビールなどをとる。反対に、漢民族にもウイグル族の羊肉の串焼き（シシカバブ）などが浸透し、漢民族がウイグル族の店に買いに来る。分離して競争しながら、部分的に交換・協力関係が生まれているようなのだ。⁽⁷⁾

ガイドのY氏によれば、ウイグル族の会社は一定数の漢民族を雇用することを義務づけられているのに対し、漢民族の会社にそういう義務はなく、不平等だが、ここでは漢民族の会社もウイグル族を雇わないと商売ができないとのこと。ただし、個人商店は別だそう。なお、ここでも少年たちが実によく店を手伝っている様子がうかがえた。

5. 再びウルムチのエスニック・シーンへ

(9月9日)

深夜のフライトで再びウルムチへ。

朝、元明星大学大学院生のGさんとホテルのロビーで落ち合い、今年度明星大学社会学科に研究員として派遣されているグリナルさんのご両親の家を訪問。父親R氏（52歳）は自治区委員会の委員で、副秘書長（カシュガル出身。北京の政治学校を出てから、軍の学校の教官を務め、さらに現職に移動した）。母親A氏は自治区計画生育委員会副主任（カシュガルの近くのアトシ出身で、13年前から現職）。ともに民族エリートと言ってよいだろう。

R氏の勤務先の車で市内見学。まず、ウイグル族の伝統的な二道橋バザールへ。ここは、昨年度から明星大学社会学科で非常勤講師をお願いしている李天国先生がその著『移動する新疆ウイグル人と中国社会』で取り上げている、ウイグル族のもっとも活発なエスニック・マーケットである。⁽⁸⁾ 500mくらい沿道に小規模店舗が並び、さらにその奥にバザールが展開しており、非常に活気がある。漢民族も買い物に利用するという。さらに、回族の陝西大寺とウイグル族の南門モスクを訪ねる。前者の周りが静かなのに比べ、後者の周囲はウイグル族で賑わっている。

R氏によれば、ウルムチ市全体では1日4万人の流動人口があるという。⁽⁹⁾ ウルムチ市の人口は180万人だが、流動人口を入れると200万人を超えるらしい。ウイグル族も入ってくるが、漢民族も増えている。近年では、三峡ダム建設予定地からの移住者が大量に移住しつつあり、さらに新疆に綿の季節労働者として10万人の漢民族が移住してきたという。

夜はウイグル・レストランでフロアーの結婚披露宴を見ながら二階席で食事。ウルムチ市内には十数のこの種の宴会場があるようだ。結婚披露のパーティは出席者が民族ダンスや社交ダンス（旧ソ連時代の影響か）を踊り出し、新郎新婦やその両親もカップルを組んで踊る。みんなが一緒に楽しんでいる様子は、日本の結婚式とは相当雰囲気異なり、印象深いものがある。これがウルムチ最後のエスニック・シーンとなった。

6. 今回の旅を振り返って

私が1970年代末に初めて訪れた「改革・開放」直前の中国は、本当に貧しかった。小さくて暗い北京空港。冷たい印象の空港職員。人民公社の最後の段階の中国では、外国人が自由に動き

回れるところはまだ大幅に限定されていたし、人民公社の幹部の話も公式的なものばかりであった。

そして、「改革・開放」後22年の中国。帰途にトランジットで寄った、昨年新装なったばかりの北京空港は、左右にウィングを大きく広げ、関西空港のデザインに似ている（上海の浦東新空港も巨大なものであった）。また、外国人が旅行できる場所も大幅に緩和され、各地で観光地化が進むとともに、個人宅訪問も自由にできた。人々も民族問題など政治問題の本音は別として、かなり自由に個人の意見を述べるようになった。

新疆は私にとって、1997年に訪ねた内蒙古自治区に次いで2つ目の少数民族自治区である。内蒙古には漢民族が相当に早い段階から入植していたが、新疆には今日まさに現在進行形で漢民族がどんどん入っている。都市部ではスーパーやデパートなどで物質的に豊かになった生活を垣間見ることができるが、それだけではなく、各地で観光開発が進められ、ホテルや観光地で「円」が通用することも印象に残った。「改革・開放」は実に20年余にして中国国内の移動だけでなく、人の国際移動も確実に促している。もっとも、少数民族自治区ではまだ海外に行く機会をもつ人は、民族エリートや特別に許可された留学生、商人、巡礼者などに限定されてはいるが――。

一方、少数民族自治区の政治の中核は基本的に北京中央がしっかりと握っている（自治区の主任は漢民族であり、少数民族はNo. 2にとどまる）。中国の民族政策の変遷からすれば、「多民族共生」とは当該自治区域での少数民族自治を前提とした「漢民族による支配のパラダイム」をあくまでも意味しよう。⁽¹⁰⁾

漢民族中心の体制は、経済変動のなかで、少数民族にとっても漢語を学習した方が階層の階

段をのぼる上で有利な状況を生み出しているが、かれらの民族的アイデンティティはどのように変容していくのだろうか。また、ウイグル族多住地区やチベットなどは、歴史的に見ても地政学的にも明らかに非中国（非漢民族）圏に属し、地域格差が拡大する中で、とりわけ農村部では貧困問題も深刻化している。ソ連の解体と少数民族国家の独立、香港返還後の「一国二制度」の実験、台湾の独立志向の動向などの下で、新疆ウイグル自治区においても、エスノ・ナショナリズムの動きが時折報じられる。⁽¹¹⁾ 今日のグローバル化の進展は、国内外の都市・地域間のネットワークを強めると同時に、国家という枠組みを確実に変容させつつある。今回の旅は駆け足であったが、教育と階層、経済と人の移動の観点から、その変動の一端を垣間見た旅であった。とくに「西部大開発」とそれに伴う人の移動が今後、新疆ウイグル自治区をどのように変えていくのか、また、多くの国々と国境を接する多民族国家・中国が将来どのように展開していくのか、これからも関心をもって注目していきたい。

【付記】 今回の旅では、私立大学協会の都竹武年雄氏と渡部伸治氏に大変お世話になった。記して感謝する。

【註】

- (1) 邵春芬「上海の地理的・歴史的肖像」田嶋淳子編『上海-甦る世界都市-』時事通信社、2000所収
- (2) 犬憲迅「上海経済の肖像」田嶋淳子編、同上書所収
- (3) 中国では1986年の国民経済・社会発展第7次5ヵ年計画で、「三個経済地帯」の区分（地域的配置と地域経済発展政策）が公表されている。「改革・開放」政策はこの区分により、東部が

「先に豊になり、中部（内陸部）と西部（辺境部）〔すなわち東部以外の中西部〕を引き上げる」といういわゆる「先富論」が展開されてきた。「西部大開発」は、こうした従来の地域政策の方向転換を意味する。

最近の新聞報道によれば、「西部大開発」の対象地域は、内モンゴル、安徽、河南、湖北などの中部の9省・自治区と、四川、雲南、新疆ウイグルなど西部の10省・自治区・直轄市であり、人口は合わせて7億人を超える。これまでの「改革・開放」政策の恩恵が主に上海・江蘇・広東などの沿海の東部12省・直轄市にもたらされたものの、西部地域は取り残され、約20年間で地域格差は拡大した。

中国国家発展計画委員会によると、西部大開発はまず、道路、鉄道、空港といった交通インフラや水利、都市基盤の整備に重点を置く。さらに、天然ガスや鉱産資源を開発し、地域の特性を活かせる産業分野の企業を育て、非効率な産業構造を転換させる。観光資源を活用し、外部からの消費も呼び込む。また、生態系の破壊も深刻なため、自然環境の回復・保全に力を入れる。中西部は砂漠が拡大し、残された原生林も乱伐が進み、土壌が流失して洪水が起きやすくなっている。長江（揚子江）、黄河流域を軸に天然林を保護し、植林などに取り組むという。以上は「朝日新聞」2000年1月6日付け記事「中国、内陸部開発に着手」を参照。

ちなみに、この間の地域格差の拡大を示す指標を見ると、1988年のGDP全国占有率（シェア）は三個経済地帯別で東部54%、中西部46%（中部30%、西部16%）であったが、98年には東部58%、中西部42%（中部28%、西部14%）に拡大している。また、1人当たりGDPの全国平均倍率（全国平均を100%としたもの）は、同期間に、東部131.86%→149.07%、中部84.25%→82.52%、西部69.03%→63.70%となっ

ている。平田幹郎『中国データブック2000/2001—成長と格差—』古今書院、2000、i頁参照。

(4)中国都市部では産業活動や集中暖房ボイラーなどから排出される二酸化炭素などの大気汚染が深刻化している。また、中国政府は98年1月、ウルムチ市など63都市を「SO₂（二酸化硫黄）汚染管理地区」に指定している。平田、前掲書、20頁参照。

(5)現地で得た新疆ウイグル自治区計画出産委員会の資料「从民族自治地方实际出展突出工作重点、促进人口与计画生育事业的全面发展（民族自治区の具体的状況から出発して仕事に重点を置き、人口及び計画出産事業の全面的な発展を促進しよう）」（2000年7月発行）によれば、新疆ウイグル自治区は47民族が居住する多民族聚居区であり、主な少数民族は13種。そのうち、ウイグル族がもっとも多く813.95万人、次いで漢民族674.11万人、さらにカザフ族128.70万人、回族78.20万人、キルギス族16.41万人、モンゴル族15.91万人などであり、少数民族の合計は1073.24万人となっている。これは全人口1775万人（1999年現在）の60.45%に当たる。ウルムチ市における少数民族の比率もほぼ同じということになる。

なお、同資料によれば、同自治区の総人口は自治区発足の1955年が511.8万人、75年が1154.5万人と急増した。こうした人口急増は大きな問題となり、自治区政府は75年から漢民族に（都市部に居住する夫婦に1児まで、農村部では一定の条件を満たせば2児まで認める）、83年から少数民族にも（都市部に居住する夫婦に2児まで、農村部では3児まで認める）計画出産政策を適用している。

(6)ここでは、欧米のオリエンタリズムによる「イスラム都市」という規定を避けた。イスラム都市の多様性と農村や遊牧社会との連続性については羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究—歴

史と展望-』東京大学出版会、1991.とくに序章と終章、また、店田廣文『エジプトの都市社会』早稲田大学出版部、1999を参照。

- (7)ここには「民族共生」の小さなモデルがあるように思われる。Wallace, W. *The Future of Ethnicity, Race, and Nationality*.1997 (渡戸一郎・水上徹男訳『エスニシティ、民族、国民の将来』、近刊予定) 参照。
- (8)ウルクチには、新中国成立後に形成された「大小十字」の漢民族商業の中心地と、「二道橋」を中心とする伝統的なウイグル族のエスニック・マーケットの二つの経済中心地が市街地に存在している。李天国『移動する新疆ウイグル人と中国社会-都市を結ぶダイナミズム-』ハーベスト社、2000参照。
- (9)中国では、「改革・開放」政策以後、経済特区や開放都市の建設労働者に暫住戸籍で期限付き移住が認められるように、戸籍移動が緩和された。一方、戸籍を移さずに身柄を移住させるのを「盲流」と呼んでいたが、今日では「民工潮」という表現に代わり、社会に有用な労働者の位置づけとされている。平田、前掲書、36頁参照。
- (10)1954年中華人民共和国憲法・第三条は、次のように民族問題に関する基本原則を定めている。「中華人民共和国は統一した多民族国家である。各民族はすべて平等である。民族に対する差別や圧迫、各民族団結を破壊するいかなる行為も禁止する。各民族はすべて自己の言語・文字を使用し発展させる自由をもち、すべて自己の風俗習慣を保持しまた改革する自由をもつ。少数民族が集住する地方では区域自治を実行する。民族の自治区域はすべて中華人民共和国の不可

分の一部である。」

なお、95年時点の自治区域としては5自治区、30自治州、121自治県(旗)があるが、毛里和子によれば、それらは3つのタイプに区分される。第一に一つの少数民族の集住区を基礎とするもの(寧夏回族自治区・チベット自治区・四川省涼山イ族自治州など)。第二に、比較的人口の多い一民族の集住区を基礎にした地域に、人口の少ない民族の自治区域を含んだもの(典型はモンゴル族やカザフ族の自治州を含む新疆ウイグル自治区。内モンゴル自治区もこのタイプ)。第三に、二つ以上の少数民族の集住区を連合したもの(青海省海西モンゴル族・チベット族・カザフ族自治州など)。毛里和子『周縁からの中国-民族問題と国家-』東京大学出版会、1998、92頁。

- (11)「朝日新聞」2000年2月23日付け「動き出した中国西部大開発-摩擦の予感-」によれば、この開発は「資源開発や利用をめぐり、くすぶる民族問題を刺激する可能性がある。経済かさ上げで安定化をめざすのが江沢民指導部の狙いだが、民族側には予測される大量の漢民族の移住に対する警戒感も頭をもたげている。(中略)豊富な石油、天然ガス資源の開発がすでに着手されている新疆では『最大の利益を得るのは地元ではない』『労働者もわざわざ内地から連れてくる』などの不満が以前からある。また各民族の宗教上の規範や伝統的な生活様式の軽視、資源の乱開発や環境破壊に対する警戒感も強い」と指摘している。

(わたど いちろう、本学科教授)